

# 平成26年度

## スーパー食育スクール事業 事業結果報告書

都道府県名	東京都
学 校 名	お茶の水女子大学附属小学校
学校のホームページアドレス	http://www.fs.ocha.ac.jp/

### 1 取組テーマ

食に対して能動的な児童を育てる効果的な SHOKUIKU プログラムの構築

### 2 栄養教諭の配置状況

栄養教諭配置年 及び人数	平成21年	1人
配置されていない 場合の対応状況		

### 3 推進委員会の構成

委員長	耳塚 寛明	お茶の水女子大学副学長
委員	赤松 利恵	お茶の水女子大学教授
委員	小玉 亮子	お茶の水女子大学教授
委員	榊原 洋一	お茶の水女子大学教授
委員	菅原ますみ	お茶の水女子大学教授
委員	山崎 淳	文京区立窪町小学校校長
委員	細水 保宏	筑波大学附属小学校副校長
委員	西川 澄子	お茶の水女子大学附属小学校PTA副会長
委員	佐々木泰子	お茶の水女子大学教授・附属小学校長
委員	神戸 佳子	お茶の水女子大学附属小学校副校長
委員	岡田 泰孝	お茶の水女子大学附属小学校教諭
委員	本田 祐吾	お茶の水女子大学附属小学校教諭
委員	足立 愛美	お茶の水女子大学附属小学校栄養教諭

### 4 連携機関及び連携内容

連携機関名	連携内容
お茶の水女子大学	評価方法、アンケート作成・集計、食育指導法、ビデオ作成
文京区立窪町小学校	比較研究（アンケート調査）
埼玉県鶴ヶ島市	体験学習、資料提供、出前授業
公益財団法人キープ協会	体験学習
(財)漁港漁場漁村総合研究所	出前授業、資料提供、体験学習
東京ガス株式会社	出前授業

### 5 実践内容

事業目標
○食に対して能動的な児童の姿として、以下のような目標で研究を進めていく。 ・画一的に与えられた量を食べるのではなく、味や栄養について、また自分が食べられる量を考えて食べる ・食べたことがないものや食べ慣れていないもの、嫌いなものでも少しずつ食べようという意識

をもつ

- ・人によって味の好みや違いや文化の違いがあることを尊重する
- ・食に対して興味をもち、日常から情報を取り込む意識をもつ。何より食を楽しむ気持ちをもつ

○上記の目標に向けた取り組みが児童にどのような影響を与え、「食に対して能動的な児童」の育成に効果があるのかを客観的に評価するための要因を検討する。

### 評価指標

- 1 児童の食行動の変化
  - (1)生産・消費にかかわる理解
  - (2)食品選択の多様性にかかわる思考・判断
  - (3)給食への関心・態度
- 2 食行動と喫食量、身長・体重・運動量等健康指標
- 3 各家庭の給食・食への意識調査

### 評価方法

- 1 児童の食行動の変化
  - (1)生産者の工夫、消費者の買い物の仕方の工夫にかかわる理解（3・5年生）
    - 方法：質問紙調査、パフォーマンス評価
  - (2)食品選択の多様性にかかわる思考・判断（3・5年生）
    - 方法：質問紙調査、パフォーマンス評価
  - (3)給食への関心・態度（1・3・5年生）
    - 方法：質問紙調査
- 2 食行動と喫食量、身長・体重・運動量等健康指標との相関性の調査（3・5年生）
  - 方法：身長・体重・骨密度や喫食量等の数値データの調査  
運動量測定機器を用いた運動量調査
- 3 家庭の食への意識について（1・3・5年生）
  - 方法：質問紙調査
  - ※各家庭の給食・食への意識調査の結果と児童の食行動や運動量の関連を分析する。
- 4 本校と近隣小学校の意識調査結果の比較・分析（1・3・5年生）
  - 方法：質問紙調査

### 評価指標を向上させるための仮説(道筋)

#### 【仮説1】

栽培や調理を体験したり、生産・調理の専門家とともに学んだりすることをもとにし、給食指導等で適切に評価することにより、食に対して能動的な児童が育つのではないかと。

#### 【仮説2】

食に対して能動的な児童と健康指標の間には正の相関があるのではないかと。

仮説1、仮説2が児童・保護者へのアンケート、食行動調査、身体や運動量等のデータの比較検討によって検証されれば、SHOKUIKU プログラムが児童の健康に有効であるという可能性が示される。

### 実践内容

#### ○具体的な取組

SHOKUIKUプログラムの有効性をはかるため、大学と連携をしてインタビュー調査や話し合いを行い、それをもとにアンケートを作成した。また、アンケートなどを実施し、データ収

集・分析を行う（取組①）。

今年度のSHOKUIKUにかかわる実践を整理・分析し、実践を行うための視点を作成し、各学年で行われた実践の関連づけを行う（取組②③④）。なお、実践については、教科名が入っていない活動は、創造活動・なかまを中心に行われたものである。

① 指標作成・SSS評価のための取組

【指標作成のための取組】

○教員への個別インタビュー調査、大学教員と学年担任の話し合い

【SSS評価のための取組】

○児童の新体力テスト調査、児童の体格・骨密度・運動量調査、児童へのアンケート調査、児童の給食時食行動調査、保護者へのアンケート調査、近隣校へのアンケート調査、2回実施したアンケートのクロス集計・比較分析

② 食に対する意識を高める活動

【全学年】○給食の片付けビデオ視聴

【1年】○保護者と協働した初期の給食指導

【2年】○とうもろこしの皮むき体験

【3年】○学校畑での野菜栽培・調理体験・調べ学習

【4年】○味覚教室

【委員会】○給食の献立作成とパクパク通信作成

③ 体験を通して食について考える活動

【全学年】○郊外園での栽培活動、農業体験

【1年】○そら豆から広がる学び体験・観察・実食、秋まつりに向けた関連活動〈梨狩り、大学構内の果実探し、菜の栽培と野菜を食す体験、秋まつり〉

【2年】○たけのこ・竹ー竹をテーマにした活動ー〈竹の子掘り、竹の子観察、竹の箸づくり、流し素麺〉、秋刀魚・竹ー秋を楽しむー〈体験、発表活動等〉

【3年】○学校畑での野菜栽培・調理体験・調べ学習、農家での一日農業体験、野菜パーティー、農家体験のまとめと発表会〔社会、創造活動〕、スーパーマーケット見学・調べ・まとめ〔社会、創造活動〕

【4年】○自然と食～わたしたちの手で食事をつくろう～〈海での食体験・森での食体験〉

【5年】○和をテーマにした選択学習〈和食、和菓子の調査、研究発表〉、調理実習〔家庭〕、群馬県嬭恋村でのキャベツ収穫体験、かつお一本釣り体験、醤油工場・漁港見学

【6年】○The 東京・過去～現在の東京をテーマにした選択学習〈江戸ー力士の食文化に触れるー食体験・調査・研究発表〉、〈東京ー過去から引き継いだ食の今ー食体験・調査・研究発表〉、長野県八ヶ岳中央農業実践大学校での農作業体験活動とまとめ、調理実習〔家庭〕

④ 食に関する知識を広げる活動

【1年】○そら豆から広がる学び体験・観察・実食、秋まつりに向けた関連活動〈梨狩り、大学構内の果実探し、野菜の栽培と野菜を食す体験、秋まつり〉、秋のたべもの『おいしい おいしい』うたづくり〔音楽、創造活動〕〈創作・発表活動〉

【2年】○たけのこ・竹ー竹をテーマにした活動ー〈竹の子掘り、竹の子観察、竹の箸づくり、流し素麺〉、秋刀魚・竹ー秋を楽しむー〈体験、発表活動等〉

【3年】○学校畑での野菜栽培・調理体験・調べ学習、農家での一日農業体験、野菜パーティー、農家体験のまとめと発表会〔社会、創造活動〕、スーパーマーケット見学・調べ・まとめ〔社会、創造活動〕

【4年】○自然と食～わたしたちの手で食事をつくろう～〈江戸野菜の学習と食体験〉

【5年】○和をテーマにした選択学習〈和食、和菓子の調査、研究発表〉、沖縄県でサトウキビ栽培が盛んな理由の学習〔社会〕、群馬県嬭恋村でキャベツ生産が盛んな理由の学習〔社会〕、静岡県のカツオ漁について学習〔社会〕、山形県庄内地方で稲作が盛んな理由の学習〔社会〕、放射線の内部被ばくや被災地の酪農家の苦悩等の学習〔社会〕、調理実習〔家庭〕、五大栄養素を学び、自分たちの食生活を

見直す学習〔家庭〕

【6年】 ○The 東京・過去から現在の東京をテーマにした選択学習〈江戸―力士の食文化に触れる― 食体験、調査、研究発表〉、〈東京―過去から引き継いだ食の今― 食体験、調査、研究発表〉、比を使って考えよう―食品に比が使われるのは？―〔算数〕、調理実習〔家庭〕、日本伝統の食材について多面的に学ぶ学習―豆の仲間集―〔家庭〕〈食材について学ぶ、調理実習、マナー学習〉

【委員会】 ○給食の献立作成とパクパク通信作成

## 6 成果

### ①アンケート分析結果より

- ・食に対して能動的な子どもは、心身ともに健康的な傾向である。即ち、食に対して能動的な子どもを育てることが、心身の健康や日常の積極性につながる可能性がある。
- ・食行動が理想的な児童の抽出は、学級担当の日常観察を学年団で話し合い、決定した。教師から見て食事の様子が理想的とみられる子どもは、データから見る限り、「食に対して能動的な子ども」であると言える。反面、教師が食に対して課題を抱えていると見た子どもの結果は、ばらつきがあるため、今回の調査だけでは結論を出すのが難しい。
- ・近隣対照校とのアンケート結果の比較を見る限りでは、創造活動の時間を中心に展開されている本校の SHOKUIKU は、食に対して能動的な子どもを育てるプログラムになっているといえそうである。教室だけで行う知識偏重の食育ではなく、子どもとともに体験や活動を中心に据えた SHOKUIKU が、子どもの積極性につながるのではないだろうか。
- ・同時に、対照校との比較において、疲労感が高い傾向も見られることには注意を払い、家庭との連携を図っていくとともに、長期的に追跡調査をしていく必要がある。
- ・ここまでの結果で見ると、身体の成長や骨密度、運動量と食に対して能動的であることの間には、関係性が見られない。

### ②取組に係る成果

- ・教員への聞き取り調査や話し合いから、「食に対して能動的な子どもを育てる」ための指標が見えてきた。また、その結果をもとに、「食に対して能動的な子どもを育てる」尺度を作成し、実施することができた。
- ・教員への聞き取り調査や学年との話し合いの時間をもつことで、給食指導に対する指導の仕方や教員の考え方の違いを知ることができ、最低限共通理解すべきことを意思統一することができた。
- ・「食に対して能動的な子ども」を育てるためには「体験する」ことが大切であることを、改めて認識することができた。子どもにとっては楽しんで体験することが、食べてみようという動機付けにつながっていた。この「食べてみよう」という子どもの行動が日常化していくために、これからもさまざまな体験を通した学びをつくっていく必要があると考えている。
- ・実践を中心的に行っている3・5年生は、例えば5月と7月を比べると野菜の残食量が減少していた（5年生 14.8%→5%、3年生 6.7%→4.9%）。3年生は、自分たちが実際に一緒に作業をした鶴ヶ島市の農家の野菜を使った給食時は、他学年に比べても目立って野菜の残食量が少なかった（全校児童 20.2%に対して3年生 4%）。また、自分たちの栽培した大根の葉が給食に出た際は、残食が0%、全校でも4.7%であった。さらに、給食委員が考えた献立の時も残食率が低かった。即ち、体験したことや自分たちにつながりのある人が作った・考えた食事は、食べてみようという意欲を喚起するといえるのではないだろうか。
- ・本校の課題は、「食に対して能動的な子どもを育てる」ために各学年ですすめている活動の関連づけであった。今年度の本校の実践を整理・分析した結果、「食に対しての意識を高める活動」「体験を通して食について考える活動」「食に関する知識を広げる活動」の3つの視点で活動が展開されていることがわかった。活動によっては複数の視点にまたがることもあったが、活動を整理することで、本校の目指している SHOKUIKU の全体像を明確化することができた。また、この3つの視点のうち、「食に対しての意識を高める活動」は低学年を中心に行われ、学年が上がっていくにつれて「食について考える活動」が多く行われ

ていることも示された。このことは、本校が大切にしている「考える」学習重視の教育観が大きく反映されていると判断できる。

## 7 スーパー食育スクール事業の取組状況の情報発信

### (1) 校内に向けて

- 学校だより・学年だよりにて保護者に向けて情報発信
- 授業や体験活動への保護者の参加と協力、学習発表の保護者参観
- 大学学報「お茶大 GAZETTE」での SHOKUIKU 取組報告

### (2) 校外に向けて

- 全国国立大学附属学校連盟関東地区会(関関連)研究集会・第1分科会(学校運営)にて発表
  - 本校ホームページにて取組状況等の情報発信 (<http://www.fs.ocha.ac.jp/sss2.html>)
  - 北海道札幌市立小学校栄養職員の参観受け入れ
  - 毎日小学生新聞取材受け入れ(新聞掲載2015年2月5日)
  - 本校の第77回教育実際指導研究会(参会者約2500名)の課題別部会にて情報発信
    - ・研究会で発行する要項にて、SHOKUIKUの提案と報告
    - ・当日資料として、スーパー食育スクール事業実施報告書Ⅱ章抜き刷り(実践事例集)配布
    - ・研究会1日目の課題別部会にて実践報告と協議会、講評
- コメンテーター (株)グッドテーブルズ 代表取締役 山本 謙治 氏  
共同研究者 お茶の水女子大学 教授 赤松 利恵 氏
- 東京都学校給食会取材受け入れ(東京都学校給食会会報誌430号へ掲載)

## 8 今後の課題

- ・対照校との比較においては、本校の子どもは「食に対して能動的である」傾向が見られたが、7月と11月の比較調査においては、大きな変化が見られなかった。これが、今年度の活動に効果がなかったためなのか、昨年度までも充実した活動をしていたため大きく変容しなかったのかは、定かではない。調査対象の学年の継続的な観察を行う、1年生から継続して調査をする等の方法で検証する必要がある。
- ・その他の調査結果についても母数が少ないこともあり、十分な信頼性が得られていない。その面からも、継続した実践・研究が必要であると考えます。
- ・予算の執行と実施期間が少なくとも1年間しっかり確保できると、実践や教員の研修がより一層充実できる。また、食育の「見える化」を関係機関と協働ですすめていく上でも、時間が十分に確保されることによって、データの収集や分析も精緻にすすめられるのではないかと思います。
- ・本校の来年度の年間指導計画を作成する際にも、成果で記述した3つの視点を盛り込んでいきたい。そして、各学年の創造活動の計画段階で、栄養教諭がこの視点をもって積極的に関わっていくことで、全校で取り組む SHOKUIKU が展開できると考えている。そして、それが土台となり、創造活動での食に関する活動や、各学年の学習内容に関連した栄養教諭による授業、給食との連携も推進しやすくなる。これによって教育活動全体にわたって効果的な実践を行っていくことができると考える。
- ・本校は、これまでも創造活動の時間を中心に食育を取り入れた学習を展開してきており、今年度も昨年度までと同様4月より実践を行ってきた。だが、本事業 S S S の予算執行が7月であったため、S S S に関連した調査研究が4月に始められず、アンケート時期が7月になってしまった。計画当初より、今年度2回アンケートを実施し、比較研究を主として行う予定だったため、2回のアンケートの間隔が短くなってしまうのは、致命的な問題であった。実際、近隣校との比較では有意差が認められたが、校内のアンケート比較では有意差の見られるものは多くはなかった。また、校内アンケートの結果は、有意差のあるなしどちらにしても、果たして SHOKUIKU プログラムの成果であるのかどうかを、単年度の結果のみで結論づけるのは早計だと考える。経年の変化を見ていくことで初めてプログラムの有効性が検証されるものではないだろうか。